① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第22巻 第1号　1977年 1月25日　大町山岳博物館

大谷原丸山より鹿島槍ガ岳　　撮影　木村 守文

新春雑感

新年を祝う門松が赤い紙切れに変り、餅搗きが餅叩き機にとって変えられ、果ては除夜の鐘までが電動式の鐘の音になってしまった。気がついてあたりを見廻しても、何ひとつ昔からの正月らしい気分を味わうこともなく、ほんとうにただその日が暮れて次の朝は、暦のうえで新しい年になってしまったような正月であった。

年中行事などというものは、古くからその土地を中心に息づいていた。庶民の生活の知恵が、いつの間にか素朴な感情のなかに溶け込んで、長いながい時を経ながら生まれたものだろうと思う。

そんなことにはお構いなく、今の世相は烈しく揺れ動いて、今まで大切に手がけてきた、人間の心ともいえるこうした風習が、無惨な姿で崩れ去ろうとしている。だいたい風習などといわれるものは外部からの影響を受け易く、変りやすいものである。そのために、めまぐるしい現代の社会のなかでは、それが育つための土壌が失なわれていると同時に、今まで大切にされてきたものすらも過去の闇のなかに消し去ろうとしているのである。

門松が木でなくても、餅が臼で搗かれなくても、除夜の鐘がどんな音でも、自分のいまの生活に直接関係がないといっている人が、もし自己の感情の振幅作用の機能が低下していることに気ずいたらどうだろうか。

その土地に伝わる古くからの風俗や習慣を学問として掘り起し、その経緯を明らかにしていくことも重要な役割りであろうが、それにもまして緊急な課題は、現代に生きているものの責任として、今までの生活のなかで培かわれてきた、忘れてはならない部分を自らの体験を通して正しく次の世代に伝えていくための地道で息の長い行動ではないだろうか。

新年の山重なりて雪ばかり　犀星

（大町市公民館　牛越 和男）

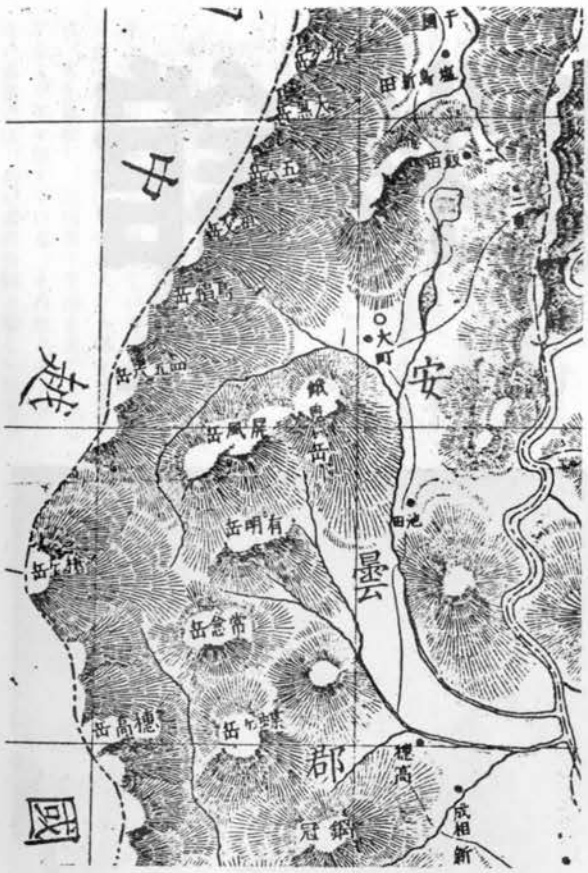
五六岳考

三井嘉雄

北アルプスに五六岳という名の山があったことを知っている人は、恐らく今ではほとんどいないであろう。

不思議なことに、江戸末期から明治の末頃にかけての文献の中にだけ五六岳は現われて、それ以後は、五六岳の名前は急速に消えて行ってしまったのである。そして、その五六岳というのは現在のどの項を指していったものなのか、全くわからない謎の山なのであった。一つの山岳について、いくつかの山名がつけられていた例は比較的多くあるが、忽然と山名が変わってしまった山というと、この五六岳しかない。

おまけに、五六岳というのは信州側の出版物にだけ出てくるから、信州からの呼び名であったことは間違いないが、地図によっては五六岳の位置が少しずれてしまって、どうやら違った山を、どちらも五六岳と称していたらしいふしもある。一応の所在としては、大町から西の方角で、県境の山稜かその近くにある山であると読みとれる。



長野県管内信濃国全図（部分）

一、五六岳

『善光寺道名所図会』の中には、高瀬川の渡り瀬から見たという有明山の写生図があって、その右遠景に五六岳が描かれている。かなり写実的な絵である。その絵は、明治三十九年刊の『日本山嶽志』にもそのまま引用されていて、本文の説明には、「信濃国北安曇郡、越中国下新川郡ニ跨ガル。北安曇郡平村ヨリ三里十四町ニシテ其山頂ニ達ス。」となっている。

明治初年の刊行といわれる『信濃国全図』によると、有明山から北へ五六岳、ガキ岳、セイクラベ岳の順で名前が記されている。ガキ岳とは、加賀藩の奥山廻りの地図によると五竜岳のことを餓鬼ケ岳と呼んだらしいが、この場合は、素直に今日の餓鬼岳と考えていいだろう。セイクラベ岳は鹿島槍ケ岳のことである。ただ、この地図は絵図面であり、広域図であるため奥にある山などは里から見る位置によって山の配列が違ってくることが考えられるので、これで見るかぎりでは、五六岳がどの山に当るのかは判定しにくい。

また、長野県庁が明治十一年に編集した『長野県治一覧概表』という小冊子の中に、「長野県管内全図」とする地図が載っているが、これには烏帽子岳の北に五六岳があって、しかも、それより南には四五六岳の名も記されているのであった。さらに、明治十六年の『信濃国地誌略』（上）の付録の地図によると、大黒岳から南へ五六岳、祖父岳、烏帽子岳、四五六岳となっているし、『学校用長野県地図』（明治二十六年）には、烏帽子岳の南に五六岳があって、別に有明山の北に南五六岳という名が出てくる。前記二つの書物は、どちらも長野県内の学校で地理の教科書として使ったもののようである。

そんなわけで、当時の五六岳というのは今のどの山なのかについては、爺ケ岳ではないかといわれてきた。大町の対山館の主人として登山者から慕われた百瀬慎太郎は、自身も山岳会のメンバーとして初期の北アルプスを歩きまわっていたが、百瀬は『山の名前』の中で、「この五六岳であるが、今の地図には全然見当らない山の名で、その存在が何処であるか皆目行方不明となってしまった。」としている。そして続けて、安永年間の地図に、「鹿島川支流矢沢の頭にあたるところに、平仮名でごろく岳と書いてあるのを見て、」それは今日の爺ケ岳の旧名であろうと述べている。今までの解釈では、五六岳というのは爺ケ岳であるとする説が有力であった。

しかし、この説にも難があって、地図によっては五六岳と祖父岳というように両方の山名が出てくるものについては、全く説明がつかなくなってしまうのである。

ところが、ここに五六岳の所在をはっきりさせる文献が見つかった。明治十四年初版の外人向けの案内書である。『*A Hadbook for Travellers in Central and Northern Japan*』（『中部及び北方日本旅行案内書』＝邦訳なし）の中で、「針ノ木経由大町から立山」という項があって、加賀新道の道すじの説明をしている。その筆者は、十三年に立山、五六岳、爺ケ岳に登ったウィリアム・ガウランドであるといわれる。説明によると、篭川谷から針ノ木峠に出てから、「峠（針ノ木峠のこと）の左側にある峰、五六岳は、尾根に低く密生したハイマツの間を登って到達する。」と出ている。五六岳というのは蓮華岳のことだったのである。さらにこの本では、「海、立山、烏帽子岳、槍ケ岳、浅間山、富士山、その他多くの山々を望むことができる。海抜九一〇〇フィート。五六岳山頂にも、爺ケ岳山頂にも、山小屋や寝られるようなほら穴などは一切なし。」とあって、五六岳は、爺ケ岳とは明らかに別の山なのであった。それから、「蓮華岳、あるいは五六という」との山名の記述によって、五六岳が蓮華岳と同一の山であることが確定的となるのだった。

これは、『信濃国地誌略』の中にある五六岳の説明、「山脈南ハ烏帽子岳ニ連ナリ、北ハ祖父岳に亘レリ」という状況にもぴったり合致している。

大正二年に燕岳から槍ケ岳に向った北尾鐘之助は、案内の横沢類蔵から山の話を聞いて、「ある時など、越中の有峰から立山連峰を経

て、五六岳から葛湯に下った時は、恰度二十八日目であった。その時は白米を八升背にして歩いたが、葛湯ではまだ五合程残っていた」（『日本山岳巡礼』）と記した。類蔵の山物語なのではあるが、これが日本人が五六岳を通ったという記録の唯一のものである。立山方面から葛温泉に下るときに通ったというから、配置からみて、この五六岳も蓮華岳のことと考えて間違いあるまい。

ところで蓮華岳は、大沢岳と呼ばれたことがあったし、三俣蓮華や白馬岳（大蓮華、小蓮華）など、ほかの蓮華岳と区別するために針ノ木蓮華といわれたこともあった。明治の中頃には蓮華山と記した紀行もある。

二、南五六岳

次に、さきにも出てきたもう一つの五六岳、つまり南五六岳を探してみたい。南を冠してあるのは、五六岳が二つあったために、両方を区別する必要からであろう。ある一時期、二つの五六岳が存在したのであった。

もちろん、こちらの五六岳も単に五六岳とだけ記されたものもあるが、前項の五六岳とは位置が違うのである。

高頭式は『日本山嶽誌』に、はじめは五六岳と南五六岳を混同していたが、補遺の中で南五六岳の方を、「信濃国南安曇郡ノ南方ニアリ常盤村ヨリ五里二十五丁ニシテ其山頂ニ達ス」と訂正している。

明治三十六年に出版された『松本平及信濃地誌』には、付録として松本平全図がついているが、この地図に出てくる五六岳は、高瀬川より南にあって、五六岳の尾根続きの南寄りの山は屏風岳となっている。『予察四十万分ノ一地図』でも、屏風岳の稜線に続いて五六岳と鍵岳の名がある。

屏風岳というのは、燕岳から大天井岳へかけての山稜をカバーする山名であった。それが明治の後半になって、現在の燕岳だけが一つの山体としてツバクラと呼ばれるようになって、大正初年には、屏風岳の名も消えてしまったのだった。

余談ではあるが、当時、屏風岳といわれる山稜がもう一つあった。それは、爺ケ岳から針ノ木峠にかけての稜線、つまり蓮華岳の隣にあたり、これも屏風を連想させる高低の少ない連嶺である。どちらの五六岳も屏風岳に隣合っているのもおもしろい。

さて、その屏風岳より北で、高瀬川よりは南側という五六岳、あるいは南五六岳というのは、今日の餓鬼岳なのであろうと推察されるのである。ということは、二つあった五六岳は高瀬川をはさんで、一つは蓮華岳のことであり、もう一つは川の南の餓鬼岳を指していたということになる。

『長野県町村誌』は明治十二年に町村役場から提出された記事を編さんしたものであるが、その常盤村のところには、五六岳を説明して次の記述がある。「高さ凡千二百丈、周囲難定、本村の酉の方にあり。嶺上より二分し、西は同郡平村に属し、東は本村に属す。山脈南北に連り、蝶ケ岳、鎗ケ岳に続き、樹木疎にして巌石赤禿多く、嶮岨にして登路不定。渓谷多く山間の渓水集合して、一流の細流となる、名づけて乳川と称す。亦五六岳より良震に聳へたる鍬之峯、中之沢、大洞等の山峯ありて、」まさに餓鬼岳のことである。

そういえば、明治十三年の『信濃明細全図』にも、五六岳のすぐ南が屏風岳になっている。さらに、辻村伊助が明治四十二年に槍ケ岳から鳥帽子岳まで歩いたとき、鳥帽子岳の頂上から見ると、「森に閉じられた野口谷に、炭焼の烟が柱の如く登って、烟の指す東の空が五六岳の峻峰となる。」（『飛騨山脈の縦走』）として、これも餓鬼岳を指しているのであった。

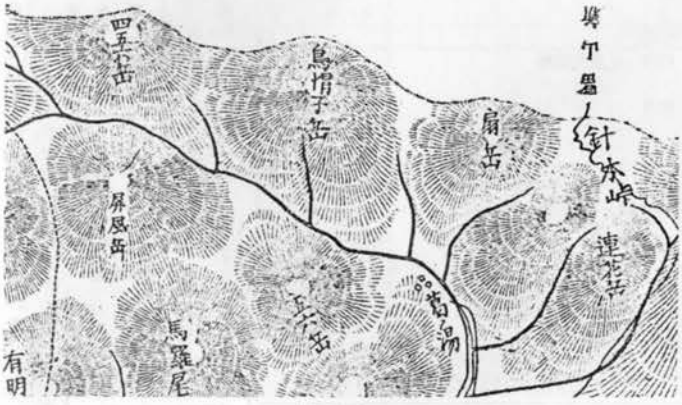
餓鬼岳については、餓鬼岳という呼び方も古くからあったようで、明治八年の『信濃村名盡』の中にある「信濃国略図」によると、北から、ガキ、有明、明神、ホタカなどの山名が出てくる。そして明治四十四年ともなれば、『日本北アルプス一部臆測図』（『山岳』第六年第一号付録）などでは、餓鬼岳の名が定着している。

厳密にいうと、現在は餓鬼岳と呼んでいる二六四七メートル峰は、当時は松川村などでは剣スリ岳と呼んでいて、逆は今は剣ズリなどといっている二六四三メートルの方を餓鬼の本岳と称していたものである。

三、四五六岳

以上、二つの五六岳のほかに、四五六岳がまた別の山なのである。つまり烏帽子岳より南の稜線上にある四五六岳のことで、『学校用長野県地図』のように、これを五六岳と記したものまであった。

『信濃明細全図』には、北から烏帽子岳、四五六岳、鎗ケ岳の順で名が出ているが、一方、その地図の高瀬川の支流の配置の関係から解読すると、この四五六岳は現在の野口五郎岳に当る。



信濃明細全図（部分）

野口五郎岳は、もともとは単にゴーロと呼ばれた。信州独特のいい方で、石がゴロついているという意味である。しかし、近くにもう一つのゴーロ（黒部五郎岳）があったので、こちらを野口のゴーロと呼び、野口五郎岳といわれるようになった。黒部の五郎岳の方は飛騨では中ノ俣岳といったし、越中では鍋岳として通っていた。

野口五郎岳については、越中側の資料によると五郎岳の名は全然出てこない。火打ケ岳という山に、現在の五郎の池らしいマークが記されていたり、文献によっては火打岳と書いて、ヒノハチあるいはシノハチのふりがなをしているものもあった。

信州名のゴーロといういい方は、明治四十三年の辻村伊助は『高瀬入り』の中で、五郎岳と書いてゴウローのルビをつけている。さらに、『日本北アルプス一部臆測図』には、高瀬川の支流五郎沢がゴウロウ沢とされていて、五郎の由来を示している。そのゴーロが四五六岳と記されるようになった理由はわからない。

北アルプスの中でもほかの山頂は、古い山名も、どの山を指すのかいい伝わって来たのに、この五六岳に関しては明治の中頃あたりから突然その名が消えてしまった。おまけに人々の脳裏からもなぜ消えてしまったのか不思議でならない。

今まで、五六岳がどの山なのか指摘されなかったことについては、五六岳がいくつもあったことがわかっていなかったので、全部の説明に見合った五六岳を割り出すことができなかったためではないだろうか。

（山と渓谷通信員）

雪と山村 (2)

—長野県北安曇郡小谷村の場合—

青木　治

四、雪を求めて

「家数二二、生活の本拠を昔どうりに、こゝにおく家二軒（今は一軒）数軒の家は転住先（糸魚川市上刈）から通作しているので、春夏秋の農繁期には、空家の家々から時々朝餉の煙りが上る。今は一八軒は空家、お堂、公会堂、分校、炭小屋等を含めて廃屋の観が強く、滅びゆく部落の姿である。」

この文章は昭和四七年一〇月頃の信越国境小谷村戸土の過疎の姿を綴ったものである。

この村には一三九の小部落（小集落）があるが、その大半はかゝる姿であり、廃滅した部落も多い。この現象は四〇年代に入ると急激に進んでいる。その原因を村人に探ねると、多発する地辷（ヌケ）と豪雪のためと云う。それに現代の社会の発展や変化、加うるに村人の経済生活の行詰り、子弟の教育問題等で、村での生活の苦しくなったことを挙げる。

然し過疎原因の一つであった、豪雪を活用しての、スキーによる過疎対策が、この頃から始まったのも面白い。それは豊富な雪を利用してのスキー場の開設である。

小谷村のスキー場は大きく次の如く別けられる。

(1)栂池高原スキー場
(2)白馬乗鞍国際スキー場
(3)コルチナ国際スキー場
(4)小谷温泉スキー場

この内、(1)(2)(3)のスキー場は国道添姫川左岸上の西山に添って展開している。小谷の人々の中の相当多数は、このスキー場を目当てに、家を移転し、民宿等で生活を立てようとする人が年々増えている。それ故スキー場に近い部落では、古い姿の分解と新しい集落の創造が始まり、充実の方向に向っているが姫川の東側や、その奥のスキー場に恵まれない部落では相変ずの過疎に悩んでいる。

表の如く村内の多くの部落からは、古い家を捨て、雪を求めてスキー場近くに、家を新築し民宿を生活の主業とする者も増えている

またシーズン外の春夏秋の頃は古い家で、農業をし、冬が来ると移転先に来る者もいる。

栂池高原では村内よりの移転家屋九四軒、村外より転住家屋五七軒を合せると一五一軒となりスキー場近くには町並が出来つゝある。

また白馬乗鞍、コルチナの両スキー場は、比較的民家が近いので、古い家を民宿風に改造して、民宿を営む者が大半である。それでも峯や立屋の部落では、古い家を空家にし、より良いスキー場の場所に新築した家を民宿にする者がいる。またその空家を借りて、近年民宿村をつくったのが、チロリン村であるし、里見団地の如く、行政計画による民宿団地もある。

小谷での今までの豪雪は人間の経済生活の向上に歯止めをしていたが、スキーが盛んになり、スキー人口が増えて来たこの頃は、小谷の地形と豪雪を利用し、立派なスキー場をつくり、禍いであった雪を福に転じ、且つては過疎の原因であった豪雪が、今では過疎を防ぐ役目を果すことに変っている。

目下の小谷村での人口移動は、雪（スキー場）を求めて、姫川東側右岸と国道添いから、西へ西へと動いている。

（北安郡誌編纂委員　大町市文化財保護審議委員　穂高町教育委員長）

民宿・旅館・商店等移動調査　（昭和. 51.10.13）　（小谷村公民館次長岡沢提供）

(1) 栂池高原スキー場方面

村県内外	移転前の住地の類別	前の部落	戸数
村内	1、昔の住地	親の原	1
		松　沢	4
		沓　掛	1
	2、スキー場に近接の場所より	沓　掛	1
	3、国道より少し上った場所とスキー場より可成離れた場所より	立　屋	6
		川　内	39
		千　国	13
		小土山	3
		池　原	1
		虫　尾	1
		坪　山	1
	4、国道添の場所より	千国崎	7
		月　岡	3
		池原下	1
	5、姫川東の部落より	黒　川	4
	6、その他の村内より	中　土	7
		池の平	1
小計			94
県内		白　馬	10
		大　町	5
		穂　高	1
		松　本	1
		長　野	1
小計			18
県外		大　阪	19
		東　京	1
		糸魚川	1
		富　山	2
		その他	16
小計			39
計			151

(2) 白馬乗鞍国際スキー場方面

村県内外	移転前の住地の類別	前の部落	戸数
村内	若栗民宿	峯	4
		立　屋	9
		千　国	3
県外			2
小計			18
村内	千国民宿 全部旧の家を改造し利用	千　国	7
村内	蔵平民宿		
	1、古い家を捨て少し上へ	蔵　平	8
	2、古い家を改造	〃	1
	3、その外より	千　国	2
		宮　下	2
		小土山	1
		峯	1
県外		大　阪	2
		その他	4
小計			21
村内	里見団地 村内より	峯	2
県外		大　阪	1
		京　都	1
		その他	1
小計			5
計			47

チロリン村
蔵平の人々は、古い家を残して、上の方に新住宅を建て、民宿を経営しているが、その空家を譲り受けて民宿を経営している。（県外の人）これがチロリン村。

計画中の民宿
立屋、峯から里見団地へと、アルプス・ダイヤモンド付近へのものとがある。

(3) コルチナ国際スキー場方面

村内	土倉民宿	11戸
	雨中民宿	16戸
計		27戸

家の移動がなく、その場所に新築・改造して民宿を行っている。

お知らせ

休館日・観覧料・開館時間の変更

52年4月1日より、**月曜日**が**休館**となります。ただし付属園の動物はみられます。

観覧料は個人—**大人・150円、小人、50円**

団体—大人・120円、小人・40円（大人は高校生以上・団体は20名以上）となります。

開館は**午前9時**より**午後4時30分**迄です。

山と博物館第22巻第1号
一九七七年一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野二三、二九三）